

学校現場における情報発信の体験

～修学旅行生中継企画の実践から見えてくるもの～

中川 齊史*1 堀田 龍也*2 生藤 元*3 蔦 利次*4

情報教育を学校現場に普及させるためには、教員自らが情報発信をし、その喜びや責任を体験することや、保護者がどういう反応をしているか等を知ることが必要である。今回、学校行事の修学旅行の様子に行く先々で、カメラ付き携帯電話から学校へ送り、留守番部隊の教師がそれを元に安否情報を作成し、web ページに発信するという作業をしてもらい、情報発信の体験をし、それぞれの立場からの調査をしたので報告する。

<キーワード> 情報発信, 携帯電話, Web ページ

1 はじめに

現在では、Web ページによる発信は、当たり前のように行われているが、学校の Web ページは、いつまでも更新されなかったり、みる側が必要としている情報の掲載が少なかったりする場合が多いように思う。

みる側にとって、どんな情報が必要なのかを、当事者になって体験してもらうことを「修学旅行生中継企画」という形でいくつかの学校へ持ち込んで、実践を行った。

2 生中継企画の概要

Fig1 のように旅行団は、カメラ付き携帯を持っていき、立ち寄った先で様々な写真を撮影する。その画像を随時携帯メールにて学校へ送信する。学校では、その画像が添付されたメールを受け取り、修学旅行用ページを作成、すぐにFTP転送し、Web で公開する。

3 実践の内容

これらの企画で、次のような項目について

成果と課題を検討した。

- ・企画へ携わることによる、職員の意識や態度について
- ・保護者の意見
- ・地域のネットワークセンターのフルサポート体制

(1) 職員の意識や行動

Fig.2 にあるようにこれらの企画に携わった教師は、初めて行う作業(メディアの操作)としての割合が高かった。

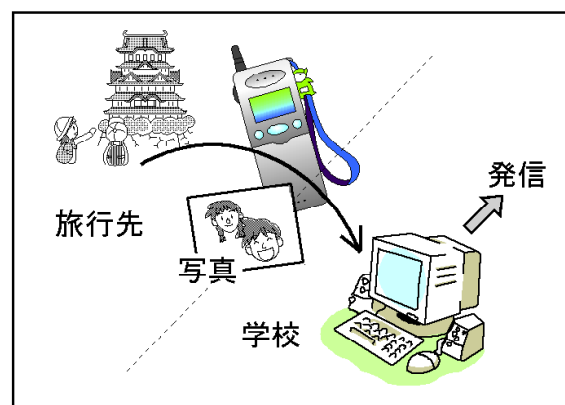


Fig1 修学旅行生中継システム

*1 徳島県三好郡教育ネットワークセンター (池田小学校) (h-naka@tcr.mkk.ed.jp)

*2 静岡大学情報学部 (horita@horitan.net)

*3 徳島県三好郡教育ネットワークセンター (箸蔵小学校) (genki@tcr.mkk.ed.jp)

*4 (株) 四国ラインズ (t-tsuta@mail.jrslines.co.jp)

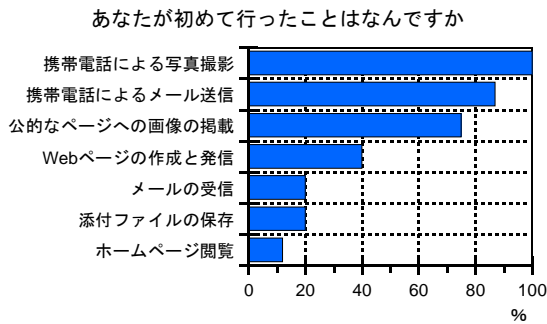


Fig.2 教員のメディア操作の経験

(2) 情報発信についての教員の感想

Fig.3 では、Web ページに発信したことについての感想を聞いてみた。これによると、発信する情報についての責任は感じているが、これをきっかけとしてさらに情報発信しようという気持ちまでは、高まっていないことがわかった。

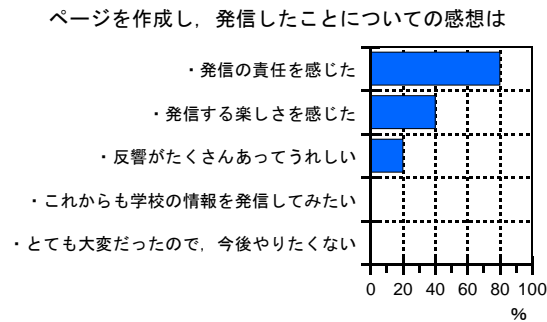


Fig.3 情報発信を経験してみた

(3) 撮影側の行動について

今回は、撮影者と発信者が完全に別れていたが、撮影者は、発信を意識していたかどうかを調べてみた。Fig.4 にあるように「この写真が使われる」という意識を多くの教師が持っていたことがわかる。

(4) ページ作成側の行動について

Fig.5 では、実際に写真を使いながらページを作成した教員に、ページ作成についての感想を聞いてみた。これによると、作業時間の確保という問題が出てきた。しかし、これらは、見る側を意識しているからこそでき

撮影するときに困ったことは何ですか

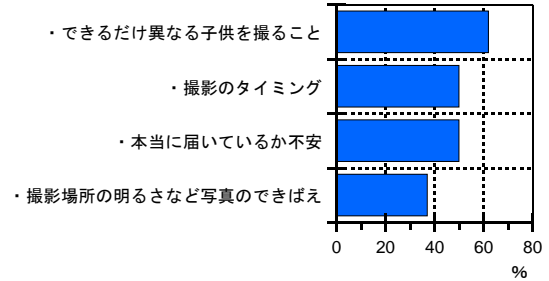


Fig.4 撮影者の意識

ページを作成することで困ったことは

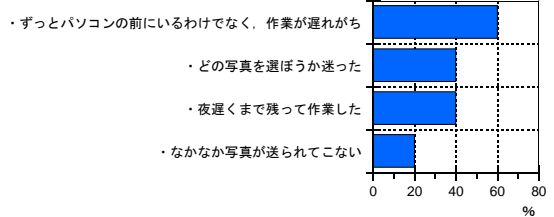


Fig.5 ページ作成者の意識

た正直な気持ちであると考えられる。

(5) 撮影者の帰ってからの行動

撮影した旅行者が、発信されている Web ページを、いつチェックしたか聞いてみるを Fig.6 にまとめた。これによると、ほとんどの撮影者が、自分の写真がどう使われて、発信されているか、気になっているようである。

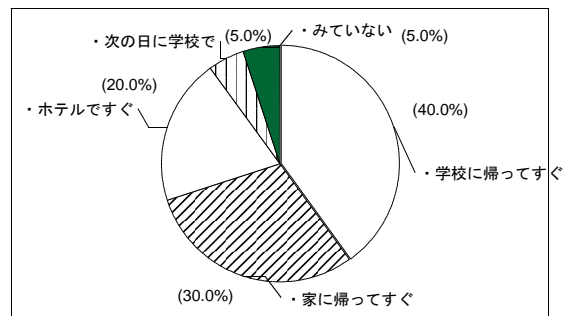


Fig.6 撮影者が、Web ページをいつ見たか

(6) 教師と保護者の意識の違い

① 生中継企画全体について

このような企画全体についての思いを、Fig.7 では、保護者と教員で比べてみた。こ

れによると、教師は全面的に賛成しているものの、保護者の中には検討が必要と考えている意見もあることがわかった。

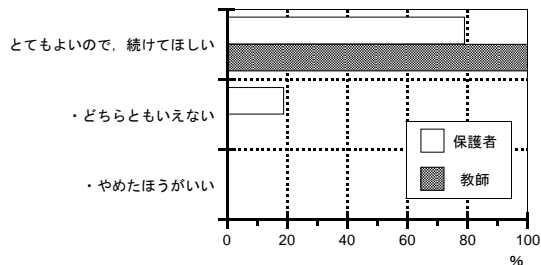


Fig.7 生中継企画についての感想

② 企画の問題点

そこで、これらの企画に対しての問題点をあげてもらったところ、保護者側と教師側での意識のずれもはっきりしてきた。(Fig.8) 保護者は、インターネット接続における普及の差を感じているが、教師は、家庭でのインターネット接続は、もはや当たり前と考えつつあることが見える。

また、教師側の実際の負担を、同僚への配慮から心配していることもわかる。

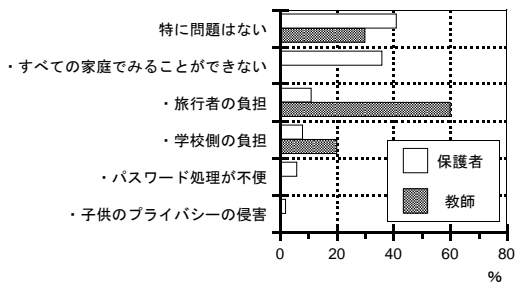


Fig.8 生中継企画の問題点

③ ページをみることのできなかつた理由

③にあったようにページをみることができない理由を挙げてもらった。教師は、学校でみることができるが、保護者は、接続環境とともに、仕事上の制約などもあることがわかった。(Fig.9) また、家庭や、職場でのインターネット普及の様子もわかった。

④ 更新間隔

保護者と教師の更新間隔の違いをみている

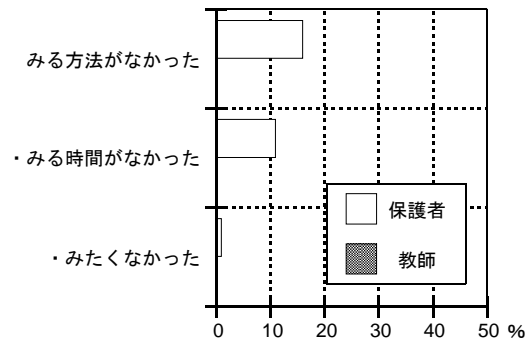


Fig.9 見えなかつた理由

と、Fig.10 のようになった。教師は、かなり頻繁に更新しながら見ているが、保護者は、いつもインターネットを見る環境にないことがわかった。

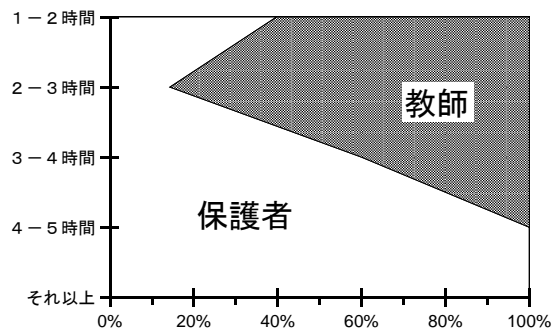


Fig.10 ブラウザの更新間隔

(7) 地域ネットワークセンターのサポート体制

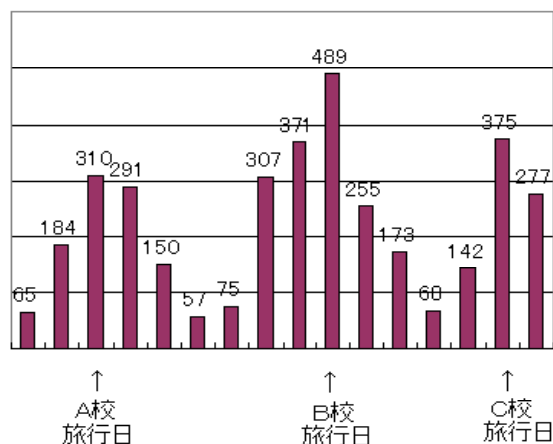
通常これらのことを学校単独で行うためには、機材はもちろん、アプリケーションの準備、携帯の貸し出し、Webの用意、当日のサポートなどかなりの準備と不安があるが、これら一式をパッケージとして用意し、当日はもちろん、前日までに、撮影担当者とWebへの発信担当者に対してきめ細やかなサポートを行った。実際のサポートは次の通りである。

- ・携帯電話の貸し出し（1週間前から）

- ・携帯電話による写真撮影と、添付によるメール送信法の実地研修（できるまで）
- ・添付メール受信と画像保存法の実地研修（できるまで）
- ・Web作成ツール（イントラパケッツを利用）の操作指導（できるまで）
- ・当日のトラブル対応（発生時）

（８）ページアクセス

Fig.11 は、これらの企画についてのページアクセス（３校分）のグラフである。これを見ると、旅行当日はもちろん、前日、後日に数多くのアクセスが見られる。保護者も、教員もかなりの興味を持ってページを見ていたことがわかる。



4 考察

通常、情報担当の教員しか作成しない Web ページに携わる業務を、様々な教員の協力の下、完成させ発信したことは、非常に意味があると思う。このように、情報を発信する責任や配慮などを、実際に体験することで、情報教育という分野に興味を持ってくれるとありがたいと思っていたが、今後も修学旅行以外の情報をもっと流したいと答えた人がいなかったのは、少し予想外であった。ページを見た人の反響が、十分伝わっていないのと、逆に責任があるから逃げたいという気持ちが働いてしまっているかもしれない。今後のア

プローチを検討したい。

撮影者に関しては、見る側を意識して撮影ができていたことは、評価できると思う。実際に発信されているページをできるだけ早く自分の目で確認したいという行動に、それが表れていると思う。

今回は、保護者からの意見もたくさん集まった。保護者からの記述意見では、画質の悪さを指摘する声がとても多かった。これは、携帯電話に搭載されているカメラの問題である。次世代携帯電話のインフラがすすみ、高画質の画像が送信できるようになると解決する問題である。保護者としては、我が子の姿を見たいという思いが強いこともわかった。

また、インターネットの家庭への普及の広がりなど、家庭によってはまだまだ敷居の高い状況であるもわかったが、逆にこういうサービスを学校が展開することで、家庭への普及の速度が速まることも考えられる。したがって、この企画の実施にあたっては、家庭で見られなくても、学校で見ることができるように準備しておくことも、学校開放という視点からも望ましいと思う。

企画意図としては、あくまでも、安否情報という速報性を重視した企画であることで、理解を求めるのがよいだろう。これは、保護者と教師の更新間隔の時間に、ずれが生じていることから言えるだろう。職員室内でかなり頻繁に更新をかけ、安否の確認をしていたと思われる。

現在 I T C E として地域の学校に対して活動している筆者は、これらの企画などをさらに検討し、企画が終了したあと、それぞれの校内で、情報教育へが広まっていくには、どういった手だてをたてるべきかを研究していきたい。

なお、この研究に対して、Jフォン（株）高松支社、JR 四国（ワーブ阿波池田支店）、昼間小学校、白地小学校の協力をいただいたことを感謝する。

